

弟子に何を伝えるのか

——『四百論』第8章を中心に——

金 澤 豊

2020年3月発行

真宗学141・142号抜刷

弟子に何を伝えるのか

— 『四百論』第8章を中心に —

金 澤 豊

1. はじめに

「誹謗正法」と経典が示す通り、正法たる仏説の非難、誤解や曲解は、悟りへの道を妨げるものと見なされてきた。特に「空」を正しく理解するための議論は、「自我に固執する見解をうち破って、世界を空なりと観ぜよ（スッタニパータ1119）¹」と説かれるように、原始仏典成立以来、広く仏教徒の課題であったと考えられる²。また、般若経典成立以降、空思想が体系化される中で、論議がより活発に行われていたことが想定される。初期大乘経典に位置付けられる『大宝積経迦葉品』や龍樹（Nāgārjuna, ca.100-）の主著『根本中頌』では、空そのものに執着することは「空見（śūnyatādr̥ṣṭi）」と呼ばれ、それは自我に執着することよりも治癒し難い重病と言われている。そのような状態に陥らないために『根本中頌』第22章第11偈では「空である」と説くべきではないといい、「空」という言葉に立脚せざるを得ないが、あくまで仮説（prajñapti）として理解せねばならないと龍樹は注意をする³。

筆者はこれまで空理解の妨げとなる捉われの一表現、dr̥ṣṭi（Tib: lta ba 「見」）の用法に注目してきたが、龍樹自身が弟子として認めたとされる聖提婆（Āryadeva, ca.170-270）の著作には言及できていない⁴。また聖提婆は、龍樹と師弟関係にあり、後代の学者によっても共に初期中観派の論師と位置付けられているが、龍樹との思想的な類似性や相違点などは未だ明確で

弟子に何を伝えるのか

ない⁵。そこで、聖提婆の主著『四百論』中で *dr̥ṣṭi* (Tib: *lta ba*) を用いている 6 箇所 (第 8 章第 7 偈に 2 箇所、第 21 偈に 2 箇所、第 9 章第 4 偈、第 12 章第 11 偈、 $\sqrt{dr̥ṣ}$ の変化形を含むとこの限りではない) のうち、第 8 章「弟子の浄化 (Pārikarmika-prakaraṇam : *slob ma yongs su sbyor ba*)」の当該箇所を中心に考察する⁶。そこから全 16 章構成の『四百論』第 8 章の主題が、空性の法を理解するためのあり方を示し、空に執着することの危険性を弟子に伝えるものであったという確認と、龍樹と聖提婆との思想的な類似点や相違点を指摘したい。

2. 聖提婆の見解

『四百論』に対する詳細な注釈『菩薩瑜伽行四百論注』を著した月称 (Candrakīrti, ca. 600-650) は序文で、「そこで法の自性の説明を聞かんとする弟子の心相續を堪能 (活動) ならしむために (*de la chos kyi rang bzhin rnam par bshad pa nyan par 'dod pa'i slob ma'i sems kyi rgyud las su rung bar bya ba'i phyir // 31a7*)」第 8 章「弟子の浄化」が説かれていると表明している。つまり、第 8 章は法の自性について教示を受ける弟子の心構えが説かれていると理解されている。以下、月称釈を参照しながら、著者である聖提婆の意図を汲み取るために各偈頌について検討していきたい。

空性の法を理解するために

第 1 偈から第 4 偈では「貪愛 (*rāga*)」が、そもそも恒常的に「存在しない (*na vidyate*)」と言い、貪愛に伴う「縛 (*bandha*)」も存在しないことを述べている。

敵対する人々に対して親愛は長く停らないように。

弟子に何を伝えるのか

同様に、全てに過誤を知るものに貪愛は長く停らない。

【第 8 章第 1 偈⁷】

貪愛 (*'dod chags : rāga*) を捨てることが可能であることを語るために、敵対するもの同士における親愛 (*mdza' ba : mitra*) を引き合いに出している。多くの人が捉われがちな「貪愛」も「親愛」も分別が生み出すものであるから、本来存在しないものであることを第 2 偈以下で示す。

ある者はある物に執着し、その同じある物がある者は嫌う。

ある者はその同じある物に迷う。それ故、欲は無益である。

【第 8 章第 2 偈⁸】

分別無くして貪愛は存在しない。「真実のもの、それは分別である。」

と誰か知者は把握しようか。 【第 8 章第 3 偈⁹】

如何なるものにも、何ものかによる縛と名づくものは存在しない。

他によって縛られているものには離脱はあり得ない 【第 8 章第 4 偈¹⁰】

同じものに対して異なる感情が生まれるように、結局のところ対象を把握する人の数だけ異なる分別が引き起こされるのだ。この第 2、3 偈は『根本中頌』第 23 章第 1 偈で説かれる「諸仏は、欲望 (*rāga*)・嫌悪 (*dveṣa*)・無知 (*moha*) の三大煩惱は誤った思考より生じる」と対応しているように映る。同様の言葉は龍樹『空七十論』第 60 偈で「同じものに貪りをなし、怒りを生じ、迷うのであるから、それらは思惟が生起せしめるもので、その思惟も真実なるものとしてあるのではない」といい、その直前の第 59 偈「意にかなうこと、意にかなわないこと、倒錯を条件として、貪り、怒り、愚かさが生じるのであって。それゆえに実態として貪りや怒りや愚かさは存在しない

弟子に何を伝えるのか

い」にも見られる。三毒が誤った理解である顛倒を条件として引き起こされ、真実としては存在しないことを両者の両著作で確認することができる。

また、第4偈に登場する束縛 (bandha) のあり方は龍樹『根本中頌』第16章「煩惱による束縛と輪廻からの解放の考察」第5偈～第8偈の議論によって理解を補える。執着を持たない者は束縛されることもないし、束縛も束縛される者も過去・未来・現在の三時の観点から分析してもあり得ないと指摘されている。

聖提婆の主張に戻ろう。『四百論』第8章第5偈の「この法に対して (asmin dharme)」と現れる法は、第4偈の「縛と名づくものは存在しない」を受けており、「存在しないというあり方」と理解できるだろう。なお、月称は第5偈「法」の注釈 (134a7) において「空性の法 (stong pa nyid kyī chos : śūnyatādharma)」と理解している。したがって、第6偈の「牟尼は解脱に至るまで法の増大を説いた。」の「法」もまた「空性の法」と解することができる。第7偈において、如来が語った法の内容に言及しており「法の自性の説明聞こうとする弟子に伝え活動を促す」とした第8章の主訴にあたる偈頌と位置付け可能だろう。

不空を空であるがごとく見るのではない。

「私は涅槃する」という邪見によっては涅槃しない」と如来たちは語った。
【第8章第7偈¹¹⁾】

ここに聖提婆の空の見方が示されている¹²⁾。つまり、大乘經典に特徴的な一切法は空であることを示し、不空なるものを空と見ることを諫めている。「私は涅槃する」と語るの、自己中心的であり邪見とみなし、邪見に基づいては涅槃しないことを例に、空をどのように理解するかを表している。このこ

弟子に何を伝えるのか

とは、先に挙げた『根本中頌』第16章の第9偈で「執着を離れば涅槃するだろう。涅槃は私のものとなるだろう (nirvāsyāmy anupādāno nirvāṇam me bhaviṣyati)」と述べた異論者の意見を紹介し、それを輪廻と涅槃に対する執着とみなして退けた龍樹の言説と同じ姿勢である。なお、龍樹は輪廻も涅槃も、輪廻し涅槃する人もいないと結論づけていた。さらに、『根本中頌』第24章で展開される空理解への批判と龍樹の反証を想起させる。龍樹は『根本中頌』第24章第8偈～第10偈において、仏説が二諦説に基づいており、勝義諦、世俗諦の二諦の区別を知らないで涅槃に至ることはできないと伝えていた。すなわち、世俗的な言語表現に依らずに真実が示されることはなく、真実の理解を得ずに涅槃に至ることは出来ないことを宣説した箇所である。

先の『四百論』第8章第7偈で聖提婆は、真実の意味を知らずに「私は涅槃する」と述べるだけ、言説に依るだけでは、邪見に過ぎず涅槃できないと言うのである。その根拠は二諦の理解が不充分だからである。それを次の第8偈で明らかに述べている。

世間的の教えのところでは活動が語られているのであり、

勝義の話のところでは止滅が語られているのである。【第8章第8偈¹³⁾】

このように聖提婆は、いわゆる無明以来の流転門の生起である十二支縁起説のあり様を「世間的の教え」として認めつつ、それぞれに固有の実体は認めない勝義のあり方を語る。以上のことから聖提婆は、『根本中頌』で説き示された龍樹の二諦説を受けて空を理解していると言えるだろう¹⁴⁾。

空への執着を注意する

では、具体的に空を理解するための方法について、聖提婆は龍樹の二諦説

弟子に何を伝えるのか

を理解することの他に何を示しているのだろうか。聖提婆は第9偈を、空を「無」と考える者の反論に応える偈頌と位置付け¹⁵、第10偈において、空の理解に安住している者や、自説安住によって他者を受け入れない者を認めないという。つまり、空を最上の説だと執着する者への非難をする。

汝に自己の主張への貪著があり、他者の主張への不喜があるなら、
汝は涅槃に趣くことはないであろう。[対立する] 二を行うものに吉祥
は無い。 【第8章第10偈¹⁶】

自己の主張への執着を戒め、対立する意見を尊重しない姿勢が非難されている。これは先の二諦説を理解しないままに空性の主張への執着することと、不空を空と見ることへの注意とみなすことができる¹⁷。龍樹は『大宝積経迦葉品』§65から着想を得て『根本中頌』第13章第8偈で空性を実体的に見て、そこに執着する「空見」を強く戒めたと考えられる¹⁸。まさに、聖提婆はその考えを引き継いでおり、龍樹との思想的一致が見て取れる。また、自己の主張への執着への注意と、空性理解執着への注意は、聖提婆その人自身が立ち位置を明確にしなかった事と関係するのではないだろうか。聖提婆は中観派と自認していない。龍樹著作と伝えられる『ヴァイダルヤ論』、『廻諍論頌』に見られる「空性論者 (śūnyatāvādin)」の記述や、注釈者たちの自身の立場表明(仏護、月称たちの「縁起論者」、清弁の「中観派」)に比べて、自らの立場の表明を意図的に控えているようにも映る¹⁹。

さらに、龍樹と思想的に一致するキーワードとして、第15偈で涅槃に導くための教説理解の仕方「一切見の否定」が述べられている。

悪を先ず遮し、中間において我を遮し、最後に一切の見を遮す [べきで

弟子に何を伝えるのか

ある]。[それを] 知る者は賢者である。

【第8章第15偈²⁰】

ここでは、賢者/覚者 (buddhimat) に至るための3つの段階を説く。この三段階の修習方法に注釈書のタイトルとして「菩提瑜伽行～」と月称が付加して理解する意味と、聖提婆の特徴が垣間見られる。まず、「悪見」を含む悪をなさないこと。次いで20を数える我見(有身見)を捨て去る段階を求めている。そして修習レベルの最終段階では一切の見解の否定を述べている。これは『根本中頌』最終偈で「一切の見解を断つために正法を説かれたガウタマに帰依する。」と宣誓した龍樹の仏説理解に通じるものがある²¹。

実践を促すための比喩表現

月称の注釈では、直前に対論者が空性の万能性に対して皮肉を込めて指摘する。「それ(空性)のみを一向して説くべきである (de khon gcig pu nye bar bstan par bya'o) 140b3」と。その反論として、『四百論』第8章第18偈以降の偈頌では、「空性をあらゆる時に語るべき (stong pa nyid kun tshe brjod pa)」というのではなく、空理解の効用と副作用を薬の比喩を用いて提示している。

福德を欲するが故に空性をあらゆる時に語るべきである、と言うのではない。
非処に使用された薬は毒とならないであろうか。 【第8章第18偈²²】

空性をあらゆる時に語るのではないと示す。誤った理解に基づく空性は『根本中頌』第24章第11偈で「空性は間違って理解すると、捕まえ方を間違えたヘビのように、あるいは間違って唱えられた呪文のように、愚か者を破滅させる²³」と言われる通りである。ここで聖提婆は龍樹と異なる比喩を用い、

弟子に何を伝えるのか

cd 句の「場違いで (gnas ma yin pa : asthāna) 服用する薬が、ときには毒となる」と述べる。空を薬とするため、正しく理解するために聖提婆は応病与薬の姿勢を取っていることがわかる。そして、第8偈以前で語られていた二諦説の勝義理解を促すだけでなく、世俗理解を求めめるための新たな比喻を次のように用いて強調する。

異国人は外国語によって捉えることは出来ないように、同様に、
世間に属さずしては世間を捉えることは出来ない。 【第8章第19偈²⁴】

同じ言葉でも母国語と外国語があるように、人によって話す言葉を合わせることが言われる。つまり、世間に属している者のために分かりやすい表現や、見合った言葉を用いただけで、一辺倒に空性を述べるのではないことを巧みに表現している。前の偈頌と同様に対論者を想定するような言い回しで論破している。なお、この偈頌は後に月称が主著の『入中論』や『プラサンナパダー』で重用している²⁵。そして、重ねて病気の種類によっては全てが薬とはなりえないことを、次の第20偈で述べる。

有と無と有無と両方でない(非有非無)を説いた。
病気によっては全てが薬とは[必ずしも]言われないのではないか。
【第8章第20偈²⁶】

有と無に関する見解を四句分別で示し、あらゆる戯論を排除する。この四句分別は、龍樹著作において重要な論証方法であり、有無 (sad asad) をあらゆる側面から否定する原点は『根本中頌』第1章第7偈にみられる²⁷。これら『四百論』第18偈から第20偈に至る一連の論述は、龍樹著作を受け継いで

弟子に何を伝えるのか

いることに疑いないが、比喻表現のうちで際立った薬の喩えは龍樹著作自体には見当たらず、『根本中頌』第13章第8偈に対する鳩摩羅什訳の青目釈『中論』が広く知られている²⁸。鳩摩羅什は『百論』『提婆菩薩伝』を訳出しており、聖提婆の著作に通じていたことが分かる。鳩摩羅什が『四百論』(サンスクリット本：現存しない)から着想を得て、空性を薬に見立てる喩えを青目釈『中論』に導入したという可能性はあるだろう。

一切の滅への道

第8章は全25偈である。その終盤に「正しく見る (yang dag mthong : sam-yag dr̥ṣṭi)」という表現を用いている第21偈の内容を見てみたい。

正しく見るならば最高の処であり、幾分を見るならば善趣である。
それ故、内心の思念において賢者は常に慧を生ずる。【第8章第21偈²⁹】

ab 句は、第18偈の「非処に使用された薬は毒になるという」に対応している。注釈書によると「最高の処 (param sthāna)」は涅槃を意味し、涅槃は「正しい見方」によって実現されることを述べている。月称はそれを「知見 (jñānadarśana) と」言い換えており、内心の思念、内的思惟を元にして起こるものと示す。内心→慧→正しい見方(知見)→最高の処(涅槃)というステップが読み取れ、聖提婆による涅槃への指向性が伺える³⁰。さらに、第22偈では「真理を知る者は、現世ではなくとも確実に涅槃を得る」と補足説明をしている³¹。

そして、人間間の敵対関係によって親愛が失われるのと同じように、貪愛もまた虚なものであると示した第1偈の形式と呼応する第24偈を提示する。

弟子に何を伝えるのか

身体は無功德であることを聞けば貪愛は一刹那も停まらない。

この道によって一切の滅が得られないだろうか（いや、得られるだろう）。

【第8章第24偈³²】

ここで第1偈の形式と対応させた聖提婆にまとめの姿勢が見られる。彼は、本章で一切の自性空を説いてきた。身体に執着する必要も、身体に功德という分別知を抱く必要もない。空に執着することすら涅槃の道への妨げとなる。したがって、第24偈での貪愛を滅して拓かれた「この道」という表現に、聖提婆の見解は物事の否定だけにとどまらず、菩薩道を歩むイメージを持っていると掴むことができる。

3. おわりに

以上、『四百論』第8章の偈頌の検討と、龍樹著作との関係性を中心に見てきた。『四百論』は聖提婆の伝記や、後代の中観論師が伝える宗義書類の記述だけでなく、内容的にも『根本中頌』の理解を継承する書物として位置付けられるだろう。また、より実践的な比喩表現が多用されていることも注目すべき点である。

第8章の主題は、現存のチベット訳や、おおよそ対応する玄奘訳『廣百論』に「教戒弟子品」と記されている通り、弟子に向けたメッセージであると理解できる。その内容は涅槃に至るための正しい空性理解である。空性理解についての注意、それ自体は『根本中頌』をはじめとした他の龍樹著作に多く見られるが、その内容をもって「(弟子の) 浄化、治浄 (pārikarmika)」と位置付けたのは聖提婆の特徴と言える。月称が、この章を「弟子に法の自性の説明をする章」と言ったように、『四百論』は、弟子に法の無自性空を正しく理解することが涅槃への道であることを示している。法とは、聖提婆が

弟子に何を伝えるのか

第8章の第5偈から第7偈頌で繰り返した空性の法であり、遡れば龍樹が帰依した仏陀の正法でもある。この内容を意図的に弟子へと伝えることが、中観派の潮流の最初の一滴となり、後の中論注釈者が「縁起論者」や「中観派」を自認する萌芽となったのではないだろうか。「中観派」が自認され、仏教徒内外に認識される以前の段階で、聖提婆は自己の主張や立場に執着することを強く戒めた。直接的にも間接的にも龍樹の学風を継ぐものという位置づけはなされているが、龍樹以上に実践的側面を強調する比喩と、弟子へメッセージを残す意思を確認することができた。本稿では龍樹著作と聖提婆『四百論』第8章の性格の類似点を見たが、聖提婆独自の見解を解明するためには、他の章、他著作を含めた厳密な比較検討が今後必要となる。

【略号並びに参考文献】

- MMK: *Mūlamadhyamakakārikā of Nāgārjuna*. Ye Shaoyong (叶少勇) 2011
Pras: *Prasannapadā of Candrakīrti*
Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la prasannapadā commentaire Candrakīrti, ed. Louis de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica4, [1903-1913] Reprint, Tokyo, 1977.
- 上田昇
1994 『チャンドラキールティ著『四百論注』第一～八章和訳』
Bibliotheca Indologica et Buddologica 6、山喜房仏書林
- 宇野恵教
1988 「『四百論』の月称釈と護法釈一特に第10章について一」
『印度学仏教学研究』71
- 1990 「『四百論』の月称釈と護法釈(II)」『印度学仏教学研究』76
- 瓜生津隆真
1973 「アーリヤデーヴァの王道論—『四百論』第四章について」
『インド思想と仏教 中村元博士還暦記念論集』春秋社
- 1975 「無常と死『四百論』第1章について」
『京都女子大学仏教文化研究所研究紀要』5
- 1976 「肉体と苦『四百論』第2章について」

- 『京都女子大学仏教文化研究所研究紀要』 6
1979 「不浄観と女性 『四百論』 第3章について」
『京都女子大学仏教文化研究所研究紀要』 9
- 桂紹隆・五島清隆
2016 『龍樹『根本中頌』を読む』 春秋社
- 金沢豊
2009 「空見考—『中論頌』と大乘經典との関連について」
『印度学仏教学研究』 57 (2)
- 2011 「『中論頌』における「見」の研究」 博士論文 (龍谷大学)
- 斎藤明
2001 「空性論者から縁起論者へ—Buddhapālitaを中心として—」
『空と実在：江島恵教博士追悼論集』、春秋社
- 2012 「中観思想の成立と展開—ナーガールジュナの位置付けを中心として」
『空と中観』 (シリーズ大乘仏教6) 春秋社
- 佐々木恵精
1976 「四百論にみられる空観への実践」 『印度学仏教学研究』 48
1995 「聖提婆・月称にみる菩薩道と論争—「和平」に関連して—」
『日本仏教学会年報』 61
- 1999 「アーリヤデーヴァの破邪顕正の理念」 『日本仏教学会年報』 65
- 丹治昭義
1981 「無我の教説—『四百論』 第12章の一考察—」
『東西学術研究所創立30周年記念論文集』 関西大学出版部
- 新作慶明
2016 「『プラサンナパダー』 第18章「我 (アートマン) の考察」の研究」
博士論文 (東京大学)
- 光川豊藝
1976 「四百論の護法釈と月称釈について」 『印度学仏教学研究』 48
- 宮坂宥勝
2002 『ブッダの教え スッタニパータ』 法蔵館
- 山口益
1944 『中観仏教論攷』 弘文堂書房
- Karen Lang
1983 *Aryadeva on the Bodhisattva's cultivation of merit and knowledge*,
University of Washington

- Koshin Suzuki
1994 *Sanskrit Fragments and Tibetan Translation of Candrakīrti's Bodhisattvayogācāracatuhśatakatikā*
山喜房仏書林
- Ruth Sonam
1994 *The Yogic Deeds Of Bodhisattvas Gyel-tsap on Aryadeva's Four Hundred*, Snow Lion
- Ye Shaoyong (叶少勇)
2011 『中論頌』 *Zhonglunsong (Mūlamadhyamakārikā)*, Shanghai: Zhongxi Book Company.

註

- 1 Suññato lokam avekkhassu mogharāja sadā sato, Attānudiṭṭhiṃ ūhacca evaṃ maccutaro siyā, evaṃ lokam avekkha'ntaṃ maccurājā na passatiti. *Suttanipāta*. 1119
- 2 この文言は、*Apadāna*, p.488 *Peṭakopadesa*, p.45. *Kathāvatthu*, p.64. *Nettipakaraṇa*, p.7 *Visuddhi-magga*, p.656 等、多く引用される。宮坂宥勝2002 p.428 に詳しい。
- 3 sūnyam ity apy avaktavyam aśūnyam iti vā bhavet | ubhayam nobhayam ceti prajñaptartham tu kathyate || 22.11
[真実には、如来や五蘊が] (1) 「空である」と言われるべきではない。あるいは、(2) 「空でない」とも言われるべきではない。さらに、(3) 「空であり、空でもない」とも (4) 「空でもなく、空でないこともない」とも言われるべきではない。しかし、[教化されるべき衆生の程度に応じて、言葉によって] 知らしめるために [これら四句を] 述べるのである。
『根本中頌』本文は Ye Shaoyong 2011 のテキストを、翻訳は桂紹隆・五島清隆2016を使用。
- 4 金沢豊2011
- 5 『国訳一切経中観部1』羽溪了諦氏による漢訳『中論』『百論』『十二門論』解題は詳しいが、三論宗の解説に力点を置き龍樹と聖提婆の類似、相違点という視点に欠けている。チベットのゲルク派の伝統に則って書かれたチャンキヤ・ロールベ・ドルジェ (1717—1786) の学説綱要書『学説設定』 (*Grub pa'i mtha'i rnam par bzhag pa*) の中では、両師弟を一括りに「根本転籍の中観派」と呼ぶ。cf. 斎藤明2012
- 6 底本に *Catuhśataka-Sāstra-kārikā-nāma* 東京大学文学部所蔵 デルゲ版チベッ

ト大蔵経 論疏部 中観部 2 No.3846 (北京No.5246) を用い、常に Kalen Lang: *Aryadeva on the bodhisattva's cultivation of merit and knowledge* 1983 と、Koshin Suzuki: *Sanskrit Fragments and Tibetan Translation of Candrakīrti's Bodhisattvayogācāracatuḥṣatakaṭikā* 山喜房仏書林1994を参照した。

山口益1944, pp.233-255には第8章の概要が述べられている。第8章を主題とする佐々木恵精1976は、当該箇所を「空性論への手解きを現実即して具体的に示そうとする」章といい、山口益訳と同様に「弟子の治浄」と翻訳する。本文中の和訳は注記したものを除いて、上田昇1994を用いた。統一を図るため第8章の題も上田訳に従って「弟子の浄化」とする。

偈頌に対する注釈書として Candrakīrti: *Bodhisattvayogāca-Catuḥṣataka-ṭikā* No.3865 (北京No.5266) があり、梵語断片が Haraprasad Shastri: *Catuḥṣatikā by Arya deva* (Memoirs of the Asiatic Society of Bengal, Vol.3, 1910-4, pp.449-514) に収められている。また、校訂出版されているものとしては Red-mda'a-ba (1349-1412) の注釈書、ゲルク派の伝統の中で重視される Gyel-tsap dar ma rin chen (1364-1432) による注釈書がある。その他の書誌情報は『梵語仏典の研究 論書篇』平楽寺書店1989年 pp.172-184 と、Koshin Suzuki 1994, pp.vii-xi に詳しい。聖提婆の生涯については鳩摩羅什訳『提婆菩薩伝』、吉迦夜・曇曜共訳『付法蔵因縁伝』、玄奘『大唐西域記』巻10などから読み取ることができる。2次資料としては『国訳一切経中観部1』解題、中村元選集第22巻『空の論理』pp.723-731、Kalen Lang: 1983 pp.45-66、Ruth Sonam1994: pp.10-21が参考になる。

- 7 ji ltar mi mthun mi rnams la // mdza' ba yun ring mi gnas pa //
de bzhin kun la skyon shes la // 'dod chags yun ring mi gnas so // VIII.1
- 8 tatraiva rajyate kaścic kaścic tatraiva duṣyati |
kaścīn muhyati tatraiva tasmāt kāmo nirarthakaḥ || VIII.2
la la de nyid la chags ye // la la de nyid la sdang zhig //
la la de nyid la rmongs pa // de phyir 'dod pa don med pa'o // VIII.2
- 9 vinā kalpanayāstivmaṃ rāgādīnāṃ na vidyate |
bhūtārthaḥ kalpanā ceti ko grahīṣyati buddhimān || VIII.3
rtog pa med par 'dod chags la // sogs pa yod nyid yod min ns //
yang dag don de rtog pa zhes // blo dang ldan pa su zhig 'dzin// VIII.3
- 10 kasyacit kenacit sārđhaṃ bandho nāma na vidyate |
pareṇa saha bandhasya viprayogo na yujyate || VIII.4

- 'ga' la'ang gang dang lhan cig tu // bcing pa zhes bya yod min te //
gzhan dang lhan cig bcings pa la // bral bar rigs pa ma ying no // VIII.4
- 11 nāsūnyam sūnyavad dṛṣṭam nirvāṇam me bhavaty iti |
mithyādrṣṭer na nirvāṇam varaṇayanti tathāgatāḥ || VIII.7
bdag ni myan ngan 'da' 'gyur zhes // stong min stong ltar mthong min te //
log ltas mya ngan mi 'da' bar // de bzhin gshegs pa rnams gsung ngo // VIII.7
- 12 月称は『入中論』(=MA) 第6章第34偈の教証として『根本中頌』XIII.7と、この『四百論』VIII.7とを引用し、空への執着について説明をしている。つまり『根本中頌』XIII.7と『四百論』VIII.7の意味するところが同じであると理解している。
- 13 laukikī deśanā yatra pravṛttis tatra varṇyate |
paramārthakathā yatra nirvṛttis tatra varṇyate || VIII.8
gang las 'jig rten bstan 'byung ba // de las 'jug pa gsungs pa ste //
gang las don dam bsnyad 'byung ba // de las ldog pa gsungs pa'o // VIII.8
- 14 世間的な教えとして活動 (pravṛtti) を認め、真実として説かれたものになら実体がないことは『空七十論』第67偈から第71偈でも説示されている。この箇所は『空七十論』最終部分にあたり、著者の主訴ともいべき内容である。
- 15 kiṃ kariṣyāmy asat sarvam iti te jāyate bhayam |
vidyate yadi kartavyaṃ nāyaṃ dharmo nivartakaḥ || VIII.9
kun yod ma yin ci bya zhes // khyod la 'jigs pa skye 'gyur grang //
gal te bya ba yod na ni // chos 'di zlog byed mi 'gyur ro // VIII.9
一切が無である [なら] 私は何を行うのであろうか、という恐れが汝に生ずるかも知れない。[しかし] もし所作が存在するなら、この法は [輪廻活動を] 断ずるものでないことになる。
- 16 svapakṣe vidyate rāgaḥ parapakṣe tu te 'priyaḥ |
na gamiṣyasi nirvāṇam na śivaṃ dvandvacāriṇaḥ || VIII.10
khyod la rang phyogs chags yod cing // gzhan gyi phyogs mi dga' na //
mya ngan 'das par mi 'gro ste // gnyis spyod zhi bar song mi 'gyur // VIII.10
- 17 月称によると、第10偈は「空性の主張が最勝であるとして空性の主張に執着し顛倒し、有自性の主張を非難する者、彼を非難する... (stong pa nyid kyi phyogs mchog tu bkrabs par 'gyur ro zhes stong pa nyid kyi phyogs la chags shing bzlog pa rang bzhin dang bcas pa'i phyogs la sdang ba de la klan kar 'gyur te)」偈頌である。
- 18 sūnyatā sarvadṛṣṭīnāṃ proktā niḥsaraṇaṃ jinaiḥ |

yeṣām tu śūnyatā dr̥ṣṭis tām asādhyān babhāṣire ||
rgyal ba rnam kyis stong pa nyid // lta kun nges par 'byung bar gsungs//
gang dag stong pa nyid lta ba // de dag bsgrub tu med par gsungs// MMK.
13.8

諸仏は、「空性はすべての見解を離れたものである」と説かれた。

しかしながら、「空見をもつ彼らは、不治である」とも〔諸仏は〕述べられた。

各注釈書の検討は、金沢豊2009参照のこと

19 龍樹とその中論注釈者たちの論争対立軸や立場については、齋藤明2001、
2012に詳しい

20 vāraṇaṃ prāg apuṇyasya madhye vāraṇaṃ ātmanaḥ |
sarvasya vāraṇaṃ paścād yo jānīte sa buddhimān || VIII.15 = Pras, Chap18.
v6, p.359

bsod nams min pa dang por bzlog // bar du bdag ni bzlog pa dang //

phyi nas lta ni kun bzlog pa // gang gis shes de mkhas pa yin // VIII.15

ただし、『四百論』の梵文断片には sarvasya としかなく、「一切の見解」は
蔵訳による。『根本中頌』は sarvadr̥ṣṭiprahāṇā とあり、一致するわけではない。

月称はプラサンナパダー第18章「アートマンの考察」第6偈「諸仏によって
我があるとも仮説され、また無我であるとも教えられた。また、いかなる我も
なく、無我もないとも説かれた」の注釈で、この『四百論』第VIII章第15偈を教
証として引用する。

21 sarvadr̥ṣṭiprahāṇāya yaḥ saddharmam adeśayat |
anukampām upādāya taṃ namasyāmi gautamam || MMK. 27.30

[人々に対する] 憐愍の情から、一切の [悪しき] 見解を断じるために、
[縁起という] 正法を説かれたガウタマ (=仏陀) に、私は帰依いたします。

22 bsod nams 'dod pas stong pa nyid // kun tshe brjod par bya min te //
gnas ma yin par sbyar ba'i sman // dug tu 'gyur ba ma yin nam // VIII.18

23 vināśayati durdr̥ṣṭā śūnyatā mandamedhasam |
sarpo yathā durgr̥hito vidyā vā duṣprasādhitā || X XIV.11

『順中論』大正30巻 40b 夫人不正見 少智故取空 如捉蛇不堅 如咒不善成

24 nānyayā bhāṣayā mlecchaḥ śakyo grāhayituṃ yathā |
na laukikam r̥te lokah śakyo grāhayituṃ tathā || VIII.19 (MA, p.120, Pras
Chap 18 p.370)

ji ltar kla klo skad gzhan gyis // gzung bar mi nus de bzhin du //

'jig rten pa yi ma gtogs par // 'jig rten gzung bar nus ma yin //

25 『四百論』第8章第19偈を引用する『プラサンナパダー』第18章の研究を
発表している新作慶明2016によると、当該箇所の手書き写本、注釈書の
諸本を比較検討すると新旧2系統に大別できるという。本稿でも用いている現
存『四百論』チベット訳はニマタクの訳出であり、新しい系統に属するため、
そこから『四百論』の旧訳が存在した可能性を指摘している。

26 sad asat sadasac ceti nobhayaṃ ceti kathyate |
nanu vyādhivasat sarvam auṣadhaṃ nāma jāyate || VIII.20 (Pras, Chap18.
vv8, p.372)

yod dang med dang yod med dang // gnyis ka min zhes kyang bstan te //

nad kyi dbang gis thams cad kyang // sman zhes bya bar 'gyur min nam //

VIII.20

27 『根本中頌』 I. 7ab na san nāsan na sadasan dharmo nirvartate yadā | 既
に存在するにせよ、未だに存在しないにせよ、存在しかつ存在しないにせよ、
法が生じることはない。

28 『中論』大正30巻 18c

若し人、空に於て復た見を生ずれば、是の人は化すべからず。譬えれば病あり
て服薬をもちいざれば治すべからず、病ありて服薬をもちうれば治すべきが如
し。若し薬また病を爲さば則ち治すべからず。

29 samyag dr̥ṣṭe paraṃ sthānāṃ kiṃcid dr̥ṣṭe śubhā gatiḥ |
tasmād adhyātmacintāyāṃ kāryā nityaṃ matir budhaiḥ || VIII.21

yang dag mthong na gnas mchog la // cung zad mthong na bzung 'gro
ste //

de phyir nang bdag bsam pa la // mkhas pa rtag tu blo gros bskyed // VIII.21

30 佐々木恵精1976によると第8章は「空性論への手解きを現実に即して具体的
に示そうとする」章といい、この偈頌にみられるように「涅槃への志向性」に
重点を置いたのが聖提婆の特徴であると結論づける。

31 iha yady api tattvajño nirvāṇaṃ nādhigacchati |
prāpnoty ayatnato 'vaśyaṃ punarjanmani karmavat || VIII.22 (Chap18.
vv12, p.378)

de nyid shes pas gal te 'dir// mya ngan 'das pa ma thob kyang //

skye ba phyi mar 'bad med par// nges par thob 'gyul las bzhin no//VIII.22

真理を知る者が現世においてたとえ涅槃を得なくても、

再生において勞せずして確実に得るであろう。業の如し。

弟子に何を伝えるのか

32 śrutvā śarīranairguṇyaṃ kṣaṇaṃ rāgo na tiṣṭhati |
prāptas tenaiva māreṇa sarvasyāpi nanu kṣayaḥ || VIII.24
kus la yon tan med thos nas // 'dod chags yun ring mi gnas te //
lam de nyid kyis thams cad kyang // zad par 'gyur ba ma yin nam // VIII.24